

でトラックで行った途中、満州から来たんだと鉄兵団が天幕を張って、何万人もの兵隊がずらっといましたが、恐らくあの人たちも全滅したのでしょうね。

私の妹むこが陸軍曹長で、マニラから還って来たのですが、佐賀病院の精神病棟で両手両足をくくられて入院していました。マリアに雇って精神異常になったのでした。私が「陸軍衛生軍曹の私が責任をもって預りますから」と頼んで列車に乗せて家に連れて帰りましたが、車中暴れて困りました。五カ月かけて熱を下げたら平常に戻りました。

## ビルマ出征の回顧

島根県 田部 敏夫

私は大正十一（一九二二）年六月二十六日、島根県仁多郡横田町大字八川に生まれました。徴兵検査は昭和十七（一九四二）年で第三乙種合格。私はもともと瘦せ形で、検査日の数日前より下痢で一層痩せていた

ので第三乙種になったようです。同年生まれの友達の現役入営は皆十二月に入営しましたが、私は第三乙種で、召集は翌年の三月でした。

私が応召した時の家族の構成は左の通り。

祖父	健在	鎌や種物の行商兼農業
祖母	〃	〃
父	〃	農機具販売兼農業
母	〃	〃
長男	死亡	夭折
二男（本人）	健在	穀物検査員
長女	〃	学生
三男	〃	〃
二女	〃	〃
四男	〃	〃
三女	〃	〃

ということでは生活程度はまあ中流位で、私が兵役に服することによる家庭の経済的打撃はほとんど無く、私としては後顧の憂いなく、凄愴苛烈な戦局に処して先に十二月に現役入営した友人の後を追って、召集に応

じることとはもちろん男児の本懐であり、勇躍二人の勇士と共に激励と歓迎を受け出発しました。時に昭和十八年三月十日、広島市の電信第二連隊（西部第八十一部隊）第一中隊へ入隊しました。

入隊してまず言葉に苦労しました。島根県出身者はごく僅かで、八割以上は全九州出身者。「ヨカクサ」「ヨカヨカ」「バッテン」などでした。中隊長さんは日支事変の生き残りで金鶏勲章の受賞者。大変厳しい怖い人物で、内務班の厳しき、苦しさ、虚無感でもう逃げて帰ろうかと思ったこともありました。中隊長さんは宮崎県の人。班長さんは鹿児島県の人。連隊内では他の中隊はあたかも青年学校かと思うような所もあると聞きました。

我が第一中隊は恐怖中隊でした。この苦境逆境を乗り越えて頑張った努力と根性が、終戦後の敗戦国日本の再建復興に不可欠のものであったと思います。玉磨かざれば光なしとか。

広島に初めての空襲があり、敵の戦闘機を筒の短い機銃で実弾射撃をやりました。演習ではなく、実戦で

した。またある日、四人の名前が呼ばれ、その者は外地へ出ないで内地へ残ると言われました。その四人の中に私の名前がありました。ホッとするやら多くの戦友と共に外地へ行けぬ不安やらで複雑な思いでした。

その内に中隊長室へ呼ばれ「田部二等兵、お前は後から入隊して来る新兵の教育要員として残れ」と言われました。当時私の従兄弟が別の部隊で衛生兵をしていましたが、昭和二十年八月に広島島の原爆でやられて死亡しました。私は内地に残って教育要員の予定のところ、事情が変わって七十人の初年兵戦友と一緒に外地へ出しました。助かった。内地で教育していたら原爆でやられていたのに。

昭和十八年五月二十五日、宇品港出港。南方へ。南方総軍司令官の隷下に入り、独立有線第九十三中隊要員を命ぜられる。

昭和十八年六月三日〜九日、台湾基隆へ寄港上陸、出発。これは当初予定に無かった。台湾の近海で日本の輸送船同士が衝突して、小さな船が沈没した。私は

大きい船に乗っていて助かった。この事故で航海が約一週間おくれて九日に出港しました。

昭和十八年六月十五日〜十八日、サイゴン上陸、出発。

昭和十八年六月十八日〜八月十三日、河船でブノンペン上陸出発。

昭和十八年八月十三日、列車輸送でバンコック到着。

仏印〜泰国境通過。

昭和十八年八月十七日、列車輸送でバンコック出発。

泰〜マレー国境通過。

昭和十八年八月十七日、マレー半島、プライ駅到着。

ベナン島上陸。当時英国軍の状況悪く船が動かない。島へ上陸して海軍の残飯捨て場へ走って行き、これ幸いと残飯で腹を満たした思ひ出があります。

昭和十八年八月二十九日、輸送船二隻でベナン島出発。

昭和十八年八月二十九日、マレービルマ国境通過。

(海路)

昭和十八年九月一日、陸軍一等兵となる。

昭和十八年九月三日、ビルマラングーン港上陸。

上陸と同時に英空軍の空襲を受け、乗船は撃沈され縄梯子で脱出する。

昭和十八年九月三日、ビルマ方面軍司令部付き通信隊編入下命。(森第八〇三四 部隊)

ここで思い出話を一つ。

私達の乗船がラングーンの港へ近づいた時、同じ船の高射砲部隊の上等兵が「島根県の兵隊は居らぬか!」と大声である。「ハイ! 私が島根県です。まだ外にも数人います」「よし! 皆呼んで来い」で同県人が集まりました。「お前たちはな、本当にえらい所へ入る訳だ。生命を覚悟してやらにゃいかんぞ」「はい、頑張ります」と言っている間に、船はラングーンの港へ着きました。その瞬間「空襲! 空襲!」で爆撃機の大編隊と戦闘機の大群が飛来しまし

た。先程の上等兵さんの言葉の通り正にラングーンは  
烈しい戦場でした。

次に通信にもいろいろありますが、私は農家であ  
り、また隊には大工さんもいて有線建築中隊でした。  
隊長さんは常々「有線建築は通信の花形である」と  
言っておりました。

昭和十八年三月十九日～十九年一月二十九日は空地  
防衛強化並びに次期作戦準備に明け暮れ、ラングーン  
市内のバゴタの前の西洋建築物の中に入り、暗号手と  
なって、方面軍司令部勤務となり、重要任務に随分緊  
張しておりました。

昭和十九年一月三十日～七月五日は「ウ」号作戦に  
参加。この間三月一日に上等兵に進む。

昭和十九年七月六日～十二月三十一日は「断」作戦  
に参加。この間九月一日兵長に進む。

昭和二十年一月一日～四月九日は「盤」作戦に参  
加。

昭和二十年四月十日～五月三十一日は「克」作戦に

参加。この間四月二十三日～五月三日の間、ラン  
グーンよりモールメンに反転到着する。この反転  
行動は武器弾薬食糧を満載した車両を捨て、徒歩  
で移動しました。英軍の追撃急なため夜間のみ行  
軍（昼間は敵空軍の攻撃あるため）し、食糧は無  
くなり戦友の大半は手榴弾で自殺しました。私の  
最も苦しい体験です。

昭和二十年六月一日～八月十四日は「堅」作戦に参  
加。この間八月十日伍長に昇進しました。

昭和二十年九月一日より、ビルマのムトン地区のゴ  
ム林の中に日本軍の集結地があり、手造りの木造  
の家にて生活しました。

昭和二十年九月十五日～二十一年八月一日の間、ビ  
ルマのカニンカモウ地区。ここはマレー国境に近  
い山の中で民家はありません。道路構築の作業で  
鍬、スコップ、ツルハシ、二人で土を運ぶモッコ  
等原始的な土木作業でした。兵舎は小川のそばに  
カヤ屋根を作り、土の上で寝て小川で水浴をす  
る。乾期で雨は降らず、亜熱帯でのげました

が、作業現場が日増しに遠くなり、現場通いは徒歩で疲れました。

昭和二十一年八月二日～八月二十八日はビルマのモールメン港出発しました。貨物船を改造した病院船でエンジン故障のため日本へ航行できず、漂流してスマトラ沖に流されました。船のエンジンは動いたり停ったりで、マレー半島のシンガポール（昭南島）に着港しました。そして船のエンジン修理のため上陸しました。

私は先の土木作業中に悪性熱帯病におかされ、南方軍第一陸軍病院（シンガポール）へ入院しました。病院で電撃療法を受けて正気に戻りました。軍医、衛生兵、看護婦の適切な処置治療を受けて、有り難く感謝しました。

昭和二十一年九月二日、病院船エンジン修理が完了し出港、日本へ向かう。万歳！ 万歳！ 途中、比島ルソン島沖、台湾の花蓮港沖を通り佐世保港へと急ぎました。

昭和二十一年十月十二日、佐世保港へ上陸しました。佐世保の湾内には日本海軍の軍艦がたくさん並んでいました。上陸すると港で聯合軍の検疫を受けました。南方軍では被服の補給なく、破れた半袖の上衣（針で補修したポロポロの、雑巾よりもまだ程度の悪い——横山町の戦友が佐世保の復員局の人に頼んで、記念品としてもらい受け、大切に保存しています。その現品を平成十三年九月二十五日、島根県出雲市で村上調査員は目撃し、確認した）で、その上衣に相応したパンツのようなズボンをはいて、乞食のような服装でした。そして裸にされてDDTの白い粉まみれとなり、検疫をされました。終了後新しい軍服上下をもらいました。（復員事務所の配慮で）。

昭和二十一年十月十三日～十月二十八日は佐賀県東背振山麓の国立療養所へ入所しました。山の中のバラック建です。十月二十七日夜、野田看護婦さんの好意で長く伸びた頭髮や髭を手入れしてもらって生き返ったような気持ちになりました。二十八日島根県より両親が（私の入隊後に生まれた妹を連れて）来所

し、軍医さんといろいろ話した結果、故郷へつれて帰って療養してよろしいとの判断で退所しました。

即日、国鉄の東背振駅より乗車し故郷へ向かいました。列車の中で母より握り飯一個をもらい感無量で食べました。あの両親の情けの籠った嬉しいお握りの味は、今でもはつきりと覚えており、恐らく一生涯忘れないでしょう。車中で夜となり小郡駅下車、駅前の旅館で一泊しました。

昭和二十一年十月二十九日には、故郷の駅である島根県木次線八川駅に下車、懐かしい実家へ帰りました。復員です。その内に落ち着いて横田町内の情報を集めますと、私と一緒に応召した他の二人の人はすべて戦死され、帰還は私独りという有様でした。それ以来二人（英霊）の墓詣りをして、慰霊の誠を捧げ続けております。

昭和二十二年二月結婚し、娘三人をもうけました。孫は二人おります。妻はリユーマチを患い手術をして、両脚とも人工関節をつけて、デイスービスを受けて

ております。私は元來は通信兵でしたが、最近は衛生兵になり変わりました。阿々。

戦後県庁へ行き軍歴申立書を提出したら、県の職員の方々が「お前は惜しいなあ」と。昭和二十一年十一月一日に帰れば、加算で恩給になる十二年であるのに。現状は十一年十一月で三日足らぬ事になると言われました。

現在私は七十九歳となりお陰様で元気です。毎朝六時起床、約二キロジョギング、農協の大きい建物内で体操をしております。

平成三年 県知事より感謝状（民生児童委員）

平成五年 県知事より功労賞

平成六年 町長より功労賞

平成七年 厚生大臣より功労賞

などを授与されまして、私の余生を社会福祉のために捧げることを誓っております。